OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	<Book Review> Rane Willerslev, Soul Hunters : Hunting, Animism, and Personhood among the Siberian Yukaghirs, University of California Press, 2007.
Author(s)	古川, 不可知
Citation	年報人間科学. 2013, 34, p. 253-257
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24976
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

〈書評〉

Rane Willerslev

Soul Hunters: Hunting, Animism, and Personhood among the Siberian Yukaghirs.

University of California Press, 2007.

古川 不可知

はじめに

本書は、シベリアに居住する狩猟民ユカギールの民族誌である。ユカギールはソ連時代に定住政策によって国家経済に組み入れられ、ソビエト化して実質的に母語を失うも、ソ連崩壊後に自給自足の狩猟生活へと戻った人々である [1-7]。著者であるデンマークの人類学者 Rane Willerslev は自ら狩人として 6 か月間を森で過ごした調査をもとに、ユカギールの狩人が動物や「超自然的存在」と持つ関係を考察してゆく。とりわけ、主要な獲物であるエルクに人格を認め、その姿形を真似することによってなされる狩猟の様子が観察される。そしてハイデガーやメルロ＝ポンティらの現象学の議論と、ミメーシスの概念から具体化したパースペクティヴィズムを通して、自然 / 文化といった二元論に疑義を呈し、アニミズムについて改めて真剣に考え直すことを提起する。

本稿では、まず本書全体の内容を概観したのち、特にパースペクティヴィズムとミメーシスの両概念に焦点を当てつつ、近年の人類学における「存在論的転回」の文脈から本書のインパクトを論じる。

各章の内容

第 1 章では、アニミズムに対する従来の視点を考察したうえで、本書の立場が提示される。進化論的な視点においては、アニミズムは科学の前段階にあるものとされた。また象徴人類学においては、アニミズムとは社会関係を自然に対して投影するものであった。両者は精神と世界との区分を前提とし、アニミズムを誤った思考とみなす点において共通している。これらの視点においては、動物は「本当は」人間ではないため、普遍の自然を想定する「我々」の存在論がアニミズムによってゆるがされることはない。のみならず、心理状態や社会関係を自然に押し付けるような間接的な世界理解は、自然 / 文化の二分法をさらに強化してゆく。

こうした二分法の陥穽を避けつつ、動物やモノに人格（person）を認めるユカギールの世界を真に理解するためには、世界への直接的な参与の中で織り上げられた状態として人格を見る必要があると著者は指摘し、現象学の議論を参照する。しかし、世界と完全に同一化することからは主体の経験は生じえない。そこで著者は、本稿の後半で紹介するミメーシスの概念を導入し、世界と同化しつつも常に自己を再帰的に差異化するような存在様態として、アニミズムの世界を描き出すことを提案する。

第 2 章では、動物の再生の観念を通して、共有に基づくユカギールの贈与のありかたが考察される。彼らにとっての互酬性は、持てる者が気前よく分け与えることであり、返礼の義務を伴う均衡的なものではない。自然や精霊は必ずしも常に与える者ではなく、人間との授受の関係つまり狩人と獲物の関係は、状況に応じて不規則的に入れ替わる。

第 3 章で主題化されるのは人間である。ユカギールでは、人は魂や影と訳される ayibii を持ち、先祖の ayibii が宿ることによって人間が生まれる。人は彼 / 彼女であると同時にその先祖として扱われ、自身も自らの視点と同時に先祖の視点から物事を見る。さらに ayibii はまた身体の各所において分節化し、不随意に活動する。ayibii は身体を支援する一方で、影の世界に帰ることを望んで身体を死に追いやろうともする。自己（self）とは、決して統合され得ぬ他者性を通して構築されるものである。身体や人格は、他者との関係の結果なのである。

ユカギールでは動物やモノもまた ayibii を持つ。ayibii はいずれも同一の理性的能力を持っており、世界をいかに認識するかを定めるのはそれぞれの種の肉体である。人間が獲物をエルクと見るように、悪霊（cannibal spirits）は人間をエルクと見る。個体のアイデンティティを定めるのは ayibii であったが、種間において差異を作り出すのはその肉体である（第 4 章）。

したがって、他の肉体を模倣することは対象の種となることである。狩猟の場において狩人は獲物を模倣し、獲物の視点から見て悪霊ではなく、愛すべき同族となって魅了せねばそれを狩ることはできない。しかし、完全に対象の視点と同一化することは、人間としての存在を喪失することである。そこで、不完全な模倣（ミメーシス）によって対象と共感し、動物の視点を獲得すると同時に自己の視点を保つことが重要となる。この二重のパースペクティブの状態においては、種族の間の境界は侵されて、ある種の「統一」が経験され、動物ではないが動物でないわけでもない、中間的な状態としてふるまうことになる。狩人とエルクの同時的なパースペクティブにおいては、狩人自身の人間性はエルクの視点に依存しており、エルクを単なる物体とみなすことは狩人自身を否定することになる。こうしてエルクの人間性は肯定される（第 5 章）。

第 6 章ではユカギールにおけるシャマニズムの実践が考察される。ユカギールにおけるシャマンとは独占的な専門技術を所有する人物ではなく、狩人の実践とは程度の差のみをもつ連続的な存在であることが指摘される。

第 7 章では、実践の中に生起する知が扱われる。母語を話す古老が提示する世界観も他の人々のそれと比較して一貫性や精密性が認められないことから、母語と世界観が不即不離であるとする社会科学の一般的な見解に著者は疑問を呈する。そして、インゴールドやハイデガーを引用しながら、言語が世界を分節するのではなく、日々の活動の中から「知的文化」が生まれると主張する。実用主義的なユカギールにとって狩猟の儀礼は、「コンピュータを使うように」、通常は個別の精霊や手続きを問題にしない。狩りの失敗が続いたときにはじめて、必要に応じて部分的な検討がなされる。よって世界についての矛盾するような説明は、伝統の断絶ではない。人々は体系的な「世界観」に包含されつつその断片を適用しているのではなく、常に活動の中で、必要に応じて部分的に世界の説明を活性化させるのである。

前章を受けて第 8 章では、ユカギールにおける学習と夢が扱われる。ユカギールにとって知識とは学ばれるものではなく、先祖の魂から受け継がれるものである。しかし、子供が言語を獲得するにつれて、それへの直接アクセスは不可能となり、言葉を介さぬ実践を通して再発見する必要が生じる。狩猟の知識もまた、世界の直接経験によって獲得される。同様にユカギールにとっての夢は、フロイトの言うような無意識の現れや現実の中断ではなく魂（ayibii）の経験であり、現実とともに存在している。精霊のような「不在の」概念は夢を通して学ばれる。ここでは「自然」と「超自然」や、「現実」と「構築」といった区分は用をなさない。言語の獲得は、世界の直接認識から自己を引き離す事件なのである。ただし、言語は他の種族から人間を区別する指標でもある。森の中では言葉を発しない狩人たちは、キャンプに戻ると盛んにおしゃべりをする。さもないと、自然と同化して人間としての存在を失ってしまう。

最終章ではこれまでの議論を踏まえて、デカルト的二元論ではなく、ハイデガーのような世界と人間の同化でもない、ユカギールの中間的な存在のありかたが提示される。著者によれば、人間と自然のあいだにアプリオリな境界が存在しないことは、日々の実践によって常に差異を作り出さねばならないことを意味する。それは類似と差異が同時であるような「アナロジカルな同一化」であり、この「二重のパースペクティブ」において、世界に接触すると同時に分離する存在様態を説明することこそ、本書のテーマであるアニミズムの真剣な取扱いである。著者によれば、それはミメーシスに基づいている。ミメーシスはアニミズムの実践的側面なのである。

パースペクティヴィズムとミメーシス

近年の人類学的探究においては、デカルト的二元論に由来する自然 / 文化といった二分法をいかに乗り越えていくかが大きな課題となってきた。加えて、普遍的な単一の自然が存在し、複数の文化がそれを解釈するという従来の認識論を、西洋的な視点に基づくものと批判する立場が現れている [1)]。

従来の認識論に基づく議論がとりわけ人類学にとって致命的であるのは、単一の自然とそれを反映する複数の文化という発想には、我々の文化すなわち科学こそが「現実」を正しく反映する唯一の存在論であり [Henare 2007: 11]、たとえばユカギールのアニミズムを、「本当は」存在しない精霊を信じる「劣った」思考とみなすことが含意されるからである。ブラジルの人類学者 Viveiros de Castro は、こうした西洋中心主義的な単一の存在論を棄却する「存在論的転回」を提唱し、パースペクティヴィズム及びマルチナチュラリズムという概念を提示した。本書はその延長線上に存在している。

パースペクティヴィズムとは、すべからく存在には共通の人間性が備わっており、それは同一の見方で世界を把握するが、その位置付けられる肉体によって世界のほうが異なるという考え方である。例えばアマゾン先住民（Amerindian）の思考では、ジャガーにとっての血は人間にとってのビールであり、捕獲されるバク（tapir）にとって人間は精霊である [Viveiros de Castro 1998]。こうした立場を突き詰めてゆくと、単一であるのは文化であり、自然こそが複数であるとする、マルチナチュラリズムの観念が生まれる [2)]。

本書は Viveiros de Castro の思想を評価しつつも、「経験を説明するための理論化以前に……我々の世界内存在としての身体に想像力の基礎がある」[94] としてその観念的な側面を批判し、それを分析枠組み

として採用するのではなく、狩猟という日々の実践から不可避的に生じるものとして描き直そうとする。そこで重要視されるのがミメーシスである。「ミメーシス的な共感なくして、パースペクティヴィズムは……コスモロジカルな抽象概念に過ぎない」[107]。

ミメーシスとは、プラトンにまで遡る文学史上の概念であり、アドルノにインスピレーションを受けたMichael Taussigによって人類学に導入された。Taussigにとってのミメーシスとは、対象と同一であると同時にまったく別物となることであり、人間に普遍的な他者理解の方法である。個や集団のアイデンティティは、他者性を介した同一性によって支えられる。すなわち他者と相対した模倣において自己を改変し続けることで、個人や集団は同一性を保つ。一方でミメーシスは相互的な行為である。他者を模倣する自己を他者の中に見出だし、自己と同時に他者であることによって、自他の境界は薄らいでゆく[Taussig 1993]。

かくして、二つの概念を基にアニミズムが再考され、事物に人格を認めるアニミズムは、自然/文化の区分をとらえ損ねた「未開」の思考の投影ではなく、その基礎にはミメーシスという実践と、そこから生じる「経験的知」[115]であるパースペクティヴィズムがあると論じられる。

本書の意義

Taussigによるミメーシスの概念は、相互の模倣という実践によって、人類学が囚われてきた我々/他者をはじめ、自然/文化や本質/構築といったあらゆる二分法の境界を多孔化してゆく[Taussig 1993: 253]強力な武器である。にもかかわらず、これまでの人類学においてミメーシス概念は、植民地主義的な権力関係の文脈において散発的に引用されるのみであり、権力の流用や抵抗といった啓蒙主義的な主体を前提とする実践の記述へと矮小化されてきた。これを全面的に存在論的転回の文脈へと取り入れ、しばしば思弁的とも見える人類学的な脱構築の議論にミメーシスという実践を接続したことは、本書の最大の貢献である。

そのうえでアニミズムや、あるいはパースペクティヴィズムといった枠組みを、前提としてではなく、生活世界の実践から生起するものとして描き出す点も評価に値する。動物やモノに人格を認める多様な「アニミズム的」現象が世界各地に存在することは事実であるが、それらをあらかじめ定められた枠内に回収して、一律に誤った思考とみなすことは分析者の傲慢さに他ならないからである。

結果として本書は、人間や人格的な存在を確固たる境界を持って世界と対峙する個としてではなく、さまざまな関係性のもとに織りなされる同一化と差異化の運動として、徹底的に関係的なものと描き出すことで、文化と自然の明確な区分が存在しないユカギールの美しくゆらめく世界を描き出すことに成功している。

しかし、「言語の獲得は世界の正しい理解をゆがめる」[163]と主張する著者が、言語による記述を志してフィールドに向かうとき、そう簡単に彼らの存在様態へと変容することができたのであろうか。そのうえで、彼らの存在論を言語に翻訳することなどできるのであろうか。また、その説明の妥当性はいかにして担保されるのか。もし単純に同一の状況に身を投じることで同じ世界認識にたどり着くのであれば、そ

れは単なる環境決定論ではなかろうか。誤解を恐れずに言えば、本書からも存在論的転回を目指す他のテキストと同様に、ある種のニューエイジ的な胡散臭さを感じざるを得ない。LSD（e.g. ティモシー・リアリー）や修行（e.g. カスタネダ）によるお手軽な意識変容と、大きく変わるところがないようにも見えてしまうのである。もっともこうした「胡散臭さ」は、存在論的転回の議論が西洋的な存在論のもとに形成される基準と乖離していることから生じるものであるがゆえに、根本的なジレンマである。しかし本書に関して言えば、人類学の概念を前提とすることは避けながらも、議論の枠組みとして現象学を採用し、世界の直接経験を重視しすぎたために、結局のところ著者がそこにいたという事実のみに記述の正当性が還元されているように思える。

とはいえ脳死や IPS 細胞をめぐる議論などを見ても、もはや普遍の自然を自明視し、自然と文化やヒトとモノといった二分法を前提する西洋的な存在論は、すでに日常生活のレベルでも崩壊の危機に瀕していることは確かなようである。いかにして複数形の自然を祝福し、「転回」を成し遂げてゆくか。……ではないが……でないわけでもない（not …, not not …）ような、「あれかこれか」ではなく「あれもこれも」という（我々のパースペクティブから見ると）中間的な存在のありかたを、ミメーシスという実践を通して具体的に考察してゆく本書は、完全に成功しているとは言い難くとも、「日常の実践や経験から世界の在り方にかかわる論題を導」き、「現実批判」をおこなってゆく [春日 2011: 20] うえでの、大きな手掛かりの一つを提供している。

注

1）こうした動きは 80 年代後半より存在したが、一つの潮流と認識されるようになったのは 2000 年代以降である。民族誌批判によって生起した「騒々しい」反省性の革命と対置して、Henare らはこれを「静かな革命（quiet revolution）」と呼んでいる [Henare 2007]

2）これは一見すると突拍子もない発想に見えるが、輪廻転生を信じ、「悉有仏性」として森羅万象に仏性を認める仏教思想に親しいわれわれにとっては、馴染みやすい観念であろう。紙幅の関係上、ここでは簡単な指摘にとどめる。仏教とマルチナチュラリズムの関係についてはいずれ稿を改めて論じたい。

文献

Henare, Amiria, Martin Holbraad & Sari Wastell, 2007 “Introduction” in Henare et al. (eds.) Thinking Through Things: Theorising Artefacts Ethnographically. Routledge, pp.1-31.

Taussig, Michael, 1993 Mimesis and Alterity: A Particular History of the Senses. Routledge

Viveiros de Castro, Eduardo, 1998 Cosmological Deixis and Amerindian Perspectivism. The Journal of the Royal Anthropological Institute 4(3): 469-488.

春日直樹 (編) 2011『現実批判の人類学』世界思想社